服薬情報提供書を用いて薬剤の減薬と処方再設計に繋げた事例報告

タイヘイ薬局Ａコープ店

吉田　貴大

共同演者

1. 光瀬　咲紀（所属：タイヘイ薬局Ａコープ店）
2. 山田　裕介（所属：タイヘイ薬局メディカルモールしろいし店）
3. 田中　玲奈（所属：タイヘイ薬局メディカルモールしろいし店）
4. 辻　宗一郎（所属：タイヘイ薬局メディカルモールしろいし店）
5. 林田　健作（所属：タイヘイ薬局メディカルモールしろいし店）
6. 光石　多希（所属：タイヘイ薬局メディカルモールしろいし店）

【目的】

ポリファーマシーや不適切な処方が問題となる昨今、患者の適切な薬剤治療のために、薬剤師の積極的な医師の処方設計への介入が求められている。ポリファーマシーや不適切な処方は、薬剤による有害事象の発現と密接な関係があり、多剤併用となりやすい高齢者の薬物治療においては、薬剤による有害事象のリスクが高くなることはいうまでもない。超高齢化社会を迎える日本において、高齢者の薬に関する問題を解決するために、当薬局の実施する取り組みを報告し、高齢者の適正な薬物治療に役立てることを今回の事例報告の目的とする。

【方法】

不適切な処方がなされている患者、多剤処方で減薬を希望する患者など、それぞれの患者の処方医に対して服薬情報提供書を用いて処方提案を行い、処方再設計を行った。今回の事例報告では3名の患者の処方提案事例を報告する。

【結果】

1. 患者Ａ：内服薬7種類、外用薬4種類を使用中の患者。服用する薬が多く、患者本人より当薬局に減薬の希望があったため、現在の患者の状態等を考慮し、処方医に処方提案を行った結果、内服薬のうち3種類が中止となった。②患者Ｂ：ＰＰＩのランソプラゾールＯＤ錠とエチゾラム錠が処方されている患者。ＰＰＩの漫然投与とエチゾラムによる眠気・ふらつきの副作用が発現している可能性があり、処方医に情報提供し、ランソプラゾールは中止、エチゾラムは減量となった。③患者Ｃ：腎機能低下のある患者に対して、メマンチンが処方されており、医師に情報提供を行いメマンチンは投与量が変更となった。

【考察】

かかりつけ薬局・かかりつけ薬剤師が推進されている現在の状況において、複数の医療機関または複数の診療科などから多剤が処方される場合は、かかりつけ薬剤師が適切に対応することで、適切な処方提案と薬物治療に結び付けることができる。潜在的に問題を抱えている患者においては、薬剤師の積極的な患者への介入と医療機関への処方提案が必要である。また、高齢者においては患者の肝機能や腎機能が低下している場合が多く、臨床検査値を把握しなければ適切な薬物治療を行うことはできない。患者の抱える問題を様々な視点から評価し、適切な薬物治療に結び付ける取組を継続して行うことが、当薬局における対人業務の資質向上につながると結論された。

キーワード：服薬情報提供書、ポリファーマシー、臨床検査値、副作用マネジメント